

2026年度 入試問題分析シート

名古屋大学

前期日程

科目

化 学

総 括

難易度(昨年比)

難化

昨年並

易化

分 量(昨年比)

増加

昨年並

減少

〈総 論〉

出題形式は24年度から変わらず大問3題のうち有機の大問が問1・問2に分かれた出題であった。分量・難易度ともに25年度と大きな変化なかった。

〈特記事項・トピックス〉

26年度も計算過程を問う問題は出題されなかった。例年出題されていた目新しいテーマも26年度は出題されず内容としては扱いやすかったと考えられる。計算問題が少し増えたが標準的なものが多かった。

〈合格への学習対策〉

名古屋大学では、標準的な問題をしっかりと解答できる力を身につけるのが合格への近道である。26年度は特にこの対策が重要であった。基礎的な問題集を用いて日々訓練してほしい。また、「語句」「化学反応式」なども出題されるのでしっかり対策を行って欲しい。教科書を丁寧に読み、出てくる変化（化学反応）を丁寧に確認することで対策になるだろう。さらに、26年度は目新しいテーマが出題されなかったが例年出題されており、目新しいテーマでは文章を読める力が重要となる。過去問を用いたり少し難易度の高い（文章の長い）問題などにチャレンジして読む力の対策も忘れずに行っていくと合格を勝ち取れるだろう。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範 囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
I	選択 記述 論述	化学 化学基礎	H ₂ SO ₄ を題材として	光触媒、均一触媒など丁寧に教科書を読んでいる必要がある内容が選択問題で出題された。（昨年もポリアセチレンの電気伝導性などの内容が選択問題で出題されている。）論述は無極性分子の説明が丁寧に設問中にあったので、それを参考にすれば（真似すれば）解答できたであろう。計算問題が多く出題されたが、どの問題も問題文中に書かれている内容をしっかりと整理すれば解答できるタイプの問題であった。そのため、整理できたかどうか差につながったかもしれない。例年、目新しいテーマで読ませる力を試していたのを26年度は馴染みのあるテーマではあるが、ここでその力を試したのだと考えられる。この手の問題は思い込みがうっかりミスを生むので注意してほしい。	標準
II	選択 記述	化学 化学基礎	Mn を題材として	両性酸化物を選ぶ際に錯イオンの化学式で解答させる点に注意する必要がある問題があった。また設問（4）では、頻出ではない酸化還元反応の反応式を連続してつくる必要があったが化学反応式をつくる練習をしっかりとしていれば問題なかったであろう。この問題でも問題文中にさりげなくあるヒント（反応1で生成した化合物が触媒となるなど）を見落とさずに読む必要があった。	標準

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

Ⅲ 問1	選択 記述	化学	芳香族化合物	ベンゼンの構造を決定する歴史の一部に関わる内容が出題された。このテーマを一度は触れていたかどうかを理解するまでの時間を大きく左右したと思われる。名古屋大学では、過去の歴史に関する問題（ノーベル賞、法則の発見など）をよく出題するので要注意である。選択問題が「ひずんだ環」＝「109.5°より小さい角度を含む環」やプリズマンの異性体など難しかったかもしれない。構造決定は分子量の情報を整理できたかがポイントであった。例年出ていたケト・エノール平衡に触れる設問が26年度はなかった。	標準
Ⅲ 問2	記述	化学	ペプチド（アミノ酸）	基本的な呈色実験（硫黄反応・キサントプロテイン反応・等電点など）を順番に解答する必要があったがアミノ酸の勉強がしっかりとされていれば問題なかったであろう。アミノ酸Dを決定する際、芳香族の構造決定同様に分子量に注目して出す必要があった。そのため、設問（1）の分子量が求められていないと連鎖的に失点してしまっただろう。この問題もパズルの要素があり整理する力の有無で差がついたかもしれない。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階（難・やや難・標準・やや易・易）で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度（昨年比）とは連動しません。